

『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の
書き分け規則について

栗 林 均

言 語 研 究

第121号 抜 刷

Offprinted from

GENGO KENKYU : Journal of the Linguistic Society of Japan

No. 121 March, 2002

『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について*

栗 林 均
(東北大学)

キーワード：元朝秘史，華夷訳語，漢字音訳，与位格接尾辞，傍訳

0. はじめに

『元朝秘史』におけるモンゴル語の漢字音訳方式は、第1・2巻と、第3-12巻において少なからぬ相違点があることはよく知られている¹⁾。そうした相違点のうち第1・2巻の漢字音訳方式はいわゆる甲種本『華夷訳語』の音訳方式と共通する点が多いこともまた周知の事実である²⁾。

『元朝秘史』と『華夷訳語』におけるモンゴル語の与位格接尾辞の書き分け規則は、そうした音訳方式の違いを代表するもののひとつである。村山(1961)は、モンゴル語の与位格接尾辞 -tur, -turiyan, -dur, -duriyan の tu, du を表す「圖」「途」「秃」「突」「都」といった漢字を使い分ける際に、『華夷訳語』と

* 本稿は2001年8月2-4日に中国内蒙古自治区の呼和浩特市(フフホト)市で開催された「内蒙古師範大学《蒙古秘史》与蒙古文化国際学術研討会」で発表した《mongγul-un niyuča tobčiyān》《quwa i iü》-yin ögkü orusiqu-yin teyin ilγal-un dayaburi-yi ilγan bičikü dürim-ün tuqai と題する報告をもとに補筆したものである。

『言語研究』に投稿した際、査読の先生方より貴重なご意見を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

1) 主な相違点については小澤(1994: 210-223)を参照。

2) 『華夷訳語』については、石田(1931: 1277-1280)が甲種、乙種、丙種の3種類の区別を立て、馮蒸(1981)はこれに丁種を加えて4種類としている。ここで扱う甲種本は、明の洪武十五年、翰林侍講火源潔等が勅を奉じて編纂し、洪武二十二年(1389年)に刊行された『華夷訳語』である。これは部門別に分類された漢蒙対訳語彙集の「雑字」と、上奏文や勅令のモンゴル文を漢字音訳した「来文」から成る。

『華夷訳語』全体の音訳方式および来文の体裁は『元朝秘史』と酷似しており、それらの漢字音訳が相前後して行われたことは疑いないが、両者の成立の先後に関しては議論が分かれる。これに関しては小澤(1994: 187-226)を参照。

『元朝秘史』の第1・2巻では「語種類決定原理」によっており、『元朝秘史』の第3-12巻では「語幹末音決定原理」によっていると論じた。ここでは -tur, -dur についてその趣旨を要約して、議論の出発点としたい。

まず『華夷訳語』および『元朝秘史』の第1・2巻における「語種類決定原理」についてみると、与位格接尾辞が付く単語は形態と意味によって次の3種に分類される。

- A. 形動詞 (-qu, -qui, -kui, -γsan).
- B. 人間, 人間集団および動物をあらわすことば.
- C. その他.

このカテゴリーに従って、A には「突児」、B には「途児」、C には「圖児」という漢字を使い分けたとするのが「語種類決定原理」である。

他方、『元朝秘史』の第3-12巻ではこれとは全く別の「語幹末音決定原理」によって漢字の書き分けが行われた。すなわち、単語は語幹の末尾音により、次の2種類に分けられる。

1. 語幹が母音, 二重母音, および子音 n, ng, l, m に終わるもの.
2. 語幹が上記以外 (子音 γ, b, s, d, g, r) に終わるもの.

そして、1 には「突^舌児」「都^舌児」を用い、2 には「途^舌児」「圖^舌児」を用いるという書き分けが行われた³⁾。この「語幹末音決定原理」は、古典式モンゴル文語における与位格接尾辞 ᠳᠦᠷ -dur/-dür と ᠲᠦᠷ -tur/-tür を書き分ける規則と合致している⁴⁾。これまでに出版された Haenisch (1937), Pelliot (1949), Ligeti (1971) 等の『元朝秘史』のローマ字転写において、「突」はすべて tu (または tū) と転写されているが、上の事実に基づけばこの漢字はモンゴル語の du (または dü) を表していたと考えないわけにはいかない。これに関連して、服部

3) 『元朝秘史』第3-12巻では、「突^舌児」「途^舌児」「圖^舌児」「都^舌児」のように、「児」の左肩に小さい「舌」の字を付け、『元朝秘史』第1・2巻および『華夷訳語』では「突児」「途児」「圖児」のように「舌」の字は付けない。これも両者の漢字音訳方式の相違点のひとつである。

4) 「古典式モンゴル文語」は、16世紀後半から17世紀前半にチベット語から大量の仏典を翻訳する際に規範化されたモンゴル文語を指す。それ以前の時代の13-14世紀に属するモンゴル文語ではこれとは異なる正書法や語法の規範があり、これを「先古典期モンゴル文語」と呼んでいる。「先古典期モンゴル文語」における与位格接尾辞の正書法については、栗林 (1999: 125-127) を参照。

(1946: 106-107) は、つとに『元朝秘史』において漢字「突」がモンゴル語の du (dü) を表していた可能性を指摘している⁵⁾。

本稿の目的は、『華夷訳語』および『元朝秘史』の第1・2巻において、与位格接尾辞の漢字を書き分ける際に「語種類決定原理」とは別の原理が存在していたという証拠を提示し、それに基づいて『元朝秘史』の残りの巻の書き分け規則を再検討することである。

1. 『華夷訳語』来文における与位格接尾辞の書き分け

まず、『華夷訳語』を取り上げる⁶⁾。『華夷訳語』の来文では、与位格接尾辞の音訳形として「突児」「途児」「圖児」という3種類の形が現れる。これらの形に逐語的に添えられている漢語の傍訳をみると、「時分」「時」「行」「裏」という訳が付されている。これらは、そのままモンゴル語の与位格接尾辞における以下の主要な3種類の意味・用法を表しているとみなすことができる。

1. 「時分・時」： 動作の行われる時点を表す（「～に」）
2. 「行」： 動作の向かう方向を表す（「～へ」「～に」）
3. 「裏」： 動作の行われる場所を表す（「～で」「～に」）

『華夷訳語』の来文において与位格接尾辞を表す3種類の音訳形「突児」「途児」「圖児」の現れる回数と、それらにどのような傍訳が付されているかをまとめると表1の通りである。

5) 服部 (1946: 140-144) は「秃」「途」「圖」「突」「都」の漢字にそれぞれ次のような第1種転写（「漢字の表はす音訳当時の支那語音による転写」）を付している。（右肩の数字1, 1', 2はそれぞれ、「陰平」「陽平」「上声」を表す。）

秃 (t'u²) 途 (t'u¹) 圖 (t'u¹) 突 (tu¹, t'u²) 都 (tu¹)

つまり「秃」「途」「圖」が有気音で、「都」が無気音であるのに対し、「突」には有気音と無気音の両方の種類がある。これらに対する第3種転写（「支那語音と蒙古語音と両方を参照し、同じ漢字はいつも同じ音素文字で表はす簡略転写」として、「秃」「途」「圖」には tu を、「都」「突」には du を当てている。

本稿では、漢字の音価の問題とは切り離してこれらの漢字の書き分けを検討する。ローマ字転写では「秃」「途」「圖」には tu/tü を、「都」には du/dü を、「突」には仮に tu/tü を当てた。

6) 『涵芬樓秘笈』第4集所収。上下2冊。上冊には「雑字」、下冊には「来文」がおさめられている。下冊の「来文」は、第1-28丁までの番号がついた前半の第1部と、第1-24丁までの番号が付いた後半の第2部から構成されている。

表1 『華夷訳語』来文における与位格接尾辞の音訳形と傍訳の対応⁷⁾

接尾辞	傍訳	出 現 位 置
突 児 (全23回)	「時分」 (20回)	1:03a1, 1:03b5, 1:04b1, 1:06a2, 1:06a4, 1:10a1, 1:14a3, 1:14b4, 1:14b5, 1:15a1, 1:17b1, 1:18a1, 1:18a2, 1:18b5, 1:19a4, 1:24a3, 1:26a4, 2:04a4, 2:04b4, 2:05a3
	「時」 (3回)	1:05a4, 1:10b3, 2:19b2
途 児 (全7回)	「行」 (7回)	1:14a1, 1:15a4, 1:22b1, 2:20a1, 2:21a2, 2:21b1, 2:21b2
圖 児 (全49回)	「裏」 (49回)	1:02a5, 1:02b2, 1:02b2, 1:04a1, 1:05a3, 1:07a4, 1:08a3, 1:08a4, 1:09a2, 1:11a1, 1:11a5, 1:13a5, 1:14b5, 1:15b4, 1:16a1, 1:17b1, 1:17b3, 1:19b2, 1:20a1, 1:20a4, 1:21b1, 1:22b4, 1:25b4, 1:26a3, 1:28a3, 2:01b3, 2:01b4, 2:03b5, 2:05b2, 2:06b5, 2:09a2, 2:09a3, 2:09b3, 2:10a3, 2:11a3, 2:11a4, 2:12a5, 2:14b2, 2:15b5, 2:16a1, 2:19b3, 2:20b3, 2:20b5, 2:21b2, 2:22b4, 2:23a3, 2:23b2, 2:23b3, 2:24a1

ここでは3種類の音訳形(「突児」「途児」「圖児」と3種類の傍訳(「時分・時」「行」「裏」)が一対一で完全に対応しており、例外は存在しない。これを見れば、与位格接尾辞を漢字音訳する際に、接尾辞の意味・用法によって3種類の漢字を使い分け、傍訳と対応させていたことは疑う余地がない。

村山氏の「語種類決定原理」は与位格接尾辞の意味・用法に応じてそれぞれの音訳形が接尾する単語に共通の特徴を捉えようとしたものであり、現象の大半をカバーしているものの、書き分け原理の核心を突くものではなかった。村山(1961: 121)は、『華夷訳語』来文で「突児」の「圧倒的多数は形動詞(-qu,

7) 出現位置は、来文の部(第1部か第2部か)、丁、表裏、行で示す。たとえば、1:05a4は来文の第1部、第5丁表の第4行を表す。

-qui, -kui, -γsan) に接尾している」が, edoē (今), edoēd (今次), hon (年), čay (時分) という4つの例外があることを指摘している。実際は, čay に「突児」が付いているというのは誤りで, čay には「圖児」が付いている (2:05b2) ので例外の数は一つ減ることになる。しかし, 「突児」という音訳形には例外なく「時分」または「時」という傍訳が付されていて, 「~ (する・した・の) 時に」という意味では一貫しており, 傍訳との対応という観点をもってすればそれらを例外と見なす必要はなくなる。

同様に『華夷訳語』における「圖児」についても, 村山 (1961: 121-120) は「大抵は『人間』, 『生きもの』以外のことばに接尾している」が, 「irgen (百姓), uruγ (孫), uridus (祖宗) の例外がある」としている。しかし, 「圖児」の傍訳はすべて「裏」で, 動作の行われる場所を示しており, 上の「人間をあらわす」ことばにしても「(誰々の所) に」という意味で捉えられていたと見なすことができる。上の3つの例は次のように用いられている⁸⁾。

dörben jüg-ün irgen-tür gür=tele a'uy-a delgere=jü (1:08a4)

四 方 の 民 に ま で 大 い に 広 ま り

öljei qutu[q] uruγ-un uruq-tur čin-u gürte=jü (1:16a1)

福 が 孫 の 孫 に (←汝の) 及 び

uridus-tur man-u tüsi=jü mede'ül=jü bü=le'e (2:03b5)

祖 先 に (←我らの) 委 ね て 支 配 さ せ て い た

小澤 (1994: 215) は, 村山氏の分類基準を「A. 時をあらわすことば. B. 広く生物をあらわすことば. C. その他のことば」と捉え直すことを提案しているが, 「語種類決定原理」に依拠している点は変わらない。その際, 「《時》と関係ある意味をもつ語は例外なく『突児』をとる」としているが, 《時》そのものを表す čay (時分) という語が『華夷訳語』(2:05b2) でも『元朝秘史』(01:17:02) でも「圖児」をとる例があることを見逃している⁹⁾。

8) ローマ字転写方式は Ligeti (1972) によるが, 一部変更した点がある。転写中の「=」(イコール)の記号は栗林・确精扎布 (2001) の方式によるもので, 動詞の語幹と接尾辞との境界を表す。

要するに、与位格接尾辞の3種類の音訳形と3種類の傍訳は完全に一対一で対応していることから明らかなように、書き分けの原理は接尾辞が付く「語の種類」によるものではなく、傍訳に対応した接尾辞の意味・用法によっていたと見なすことが妥当である。この書き分け規則は「語種類決定原理」に代わって「接尾辞の意味・用法決定原理」と呼ぶことができる。

2. 『元朝秘史』第1・2巻における与位格接尾辞の書き分け

次に『元朝秘史』の第1・2巻を検討する。ここでは与位格接尾辞として「突児」「途児」「圖児」「禿児」「都児」という5種類の音訳形が用いられている。『元朝秘史』第1・2巻におけるそれらの現れる回数と、それぞれの音訳形にどのような傍訳が対応しているかをみると、表2の通りである。

表2のうち、まず『華夷訳語』でみた「突児」「途児」「圖児」という3種類の形について見ると、これらは全部で111回現れる。村山(1961: 123-122)によれば、「語種類決定原理」の例外として、「突児」が形動詞以外の語幹に付いているものが4例ある。また、「途児」が「人間、人間集団及び動物」以外をあらわす語についているものが4例、逆に「圖児」が「人間、人間集団及び動物」をあらわす語に付くものが2つ、それぞれ例外として挙げられている¹⁰⁾。

しかし、表2に見るとおり、『元朝秘史』第1・2巻では『華夷訳語』の場合と同様、「突児」には「時分・時」(49回中47回)、「途児」には「行」(19回中18回)、「圖児」には「裏」(43回すべて)という漢語傍訳がそれぞれ対応しており、例外は「突児」に2回、「途児」に1回の合計3回を数えるに過ぎない(傍訳はいずれも「裏」)。ここにおいても、「接尾辞の意味・用法決定原理」による書き分けが行われていたことは明らかである。

このような書き分けがモンゴル語を漢字に音訳する際に音訳者の便宜を図ってなされたものであろうことは想像に難くない。複数の漢字を無秩序に使うよりは、ひとつの意味(傍訳)に対応してひとつの漢字を当てる方が、覚えやすくま

9) 『元朝秘史』の出現位置は四部叢刊本の巻数、丁、行数で示す。たとえば、01:31:05は第1巻第31丁の第5行を表す。

10) 実際は、「突児」が形動詞以外の語幹に付いているものは6例あるなど、若干の数え違いや見落としがある。

表2 『元朝秘史』第1・2巻における与位格接尾辞の音訳形と傍訳の対応

接尾辞	傍訳	出現位置
突児 (全49回)	「時分」 (5回)	01:34:04, 01:34:04, 02:13:10, 02:21:09, 02:26:08
	「時」 (42回)	01:31:05, 01:33:02, 01:37:02, 01:37:09, 01:40:07, 01:40:08, 01:40:09, 01:41:06, 01:42:01, 01:42:04, 01:47:10, 02:01:09, 02:03:06, 02:04:05, 02:08:06, 02:09:07, 02:09:08, 02:09:10, 02:10:02, 02:12:04, 02:12:04, 02:12:05, 02:12:06, 02:15:02, 02:15:07, 02:17:02, 02:18:06, 02:19:03, 02:20:03, 02:24:09, 02:27:04, 02:30:02, 02:36:07, 02:37:06, 02:41:03, 02:41:06, 02:41:07, 02:42:04, 02:42:05, 02:44:08, 02:44:08, 02:46:05
	「裏」 (2回)	01:13:02, 02:17:05
途児 (全19回)	「行」 (18回)	01:07:02, 01:13:06, 01:16:07, 01:17:07, 01:18:09, 01:19:03, 01:19:04, 01:23:06, 01:42:02, 01:42:08, 01:42:10, 02:11:05, 02:23:05, 02:28:03, 02:28:10, 02:29:09, 02:30:03, 02:39:07
	「裏」 (1回)	01:06:05
圖児 (全43回)	「裏」 (43回)	01:09:10, 01:17:02, 01:21:04, 01:31:05, 01:35:06, 01:39:10, 01:40:01, 01:43:09, 01:44:08, 01:44:09, 01:45:01, 01:45:03, 01:45:08, 01:46:09, 01:47:10, 02:02:07, 02:03:02, 02:04:08, 02:05:06, 02:11:02, 02:11:09, 02:13:07, 02:14:02, 02:17:01, 02:17:09, 02:18:08, 02:21:09, 02:23:01, 02:23:04, 02:23:07, 02:23:07, 02:24:07, 02:24:07, 02:24:08, 02:24:09, 02:28:10, 02:34:07, 02:40:04, 02:40:04, 02:44:06, 02:45:01, 02:45:03, 02:46:05
禿児 (全1回)	「裏」 (1回)	02:07:10
都児 (全3回)	「裏」 (3回)	01:04:09, 02:14:04, 02:14:05

た誤記も避けやすい。傍訳の「行」に対して「途」の漢字を使ったのも、そこになんらかの意味上の関連性（両方とも「みち」の意味を持つ。あるいは「いく」と「みち」の意味。）を付けて、扱いやすくしたためではないだろうか。

なお、『元朝秘史』第1・2巻では「突児」「途児」「圖児」となっていて、『華夷訳語』には現れない「秃児」「都児」という音訳形も見られるが、「秃児」が1回、「都児」が3回、両者合わせて全部で4回用いられているだけである。「秃児」という音訳形は *ger-tür* という形に用いられ、「都児」は *irgen-dür, šikui-dur* (2回) という形に現れる（出現位置は表2を参照）。「秃児」が与位格接尾辞として用いられているのは『元朝秘史』の全巻を通じてこの例ひとつだけであり、「都児」も後に見るように第3巻以降の用いられ方とは合致していない。いずれも、きわめて特殊な例と見なさざるを得ない。これらの表記は何らかの事情で後世に書写の際に紛れ込んだ可能性がある。

全115回の用例のうち、これら（「秃児」「都児」）を含めて7回が例外として存在するものの、ここでも『華夷訳語』と同様、音訳漢字の書き分けが与位格接尾辞の意味・用法によっていると結論することができる。

3.1. 『元朝秘史』第3-12巻における「途^音児」と「圖^音児」の書き分け

続けて『元朝秘史』の第3-12巻を検討しよう。上に述べたように、ここでは「語幹末音決定原理」に従った書き分けが行われている。すなわち、語幹が「母音、二重母音、および子音 *n, ng, l, m* に終わる場合」には「突^音児」「都^音児」が用いられ、語幹が「上記以外（子音 *γ, b, s, d, g, r*）に終わる場合」には、「途^音児」「圖^音児」が用いられている。第3-12巻を通じて、「突^音児」は580例のうち554例が上の原理に合致しており、26例がそれにあてはまらない例外である。「都^音児」は、18例すべてが上の原理に合致している。また「途^音児」は50例のうち48例が上の原理に合致しており、2例が例外となっている。「圖^音児」は、41例のうち40例が上の原理に合致しており、1例が例外となっている¹¹⁾。

11) 村山 (1961: 127) では「秃^音児」という音訳形が第11巻と第12巻にそれぞれ1回ずつ現れるとしているが、これは「失^音刺迭^音秃^音児 (Šira-dektür)」(11:02:07, 12:21:07) という地名の最後の音節を与位格接尾辞としたものであろう。第3-12巻で与位格接尾

ここでは、「語幹末音決定原理」をそのまま受け入れながら、「子音 γ , b, s, d, g, r に終わる語幹¹²⁾」に接尾している「途_舌児」と「圖_舌児」に注目して、両者の使い分けについて検討してみたい。『元朝秘史』第3-12巻における「途_舌児」と「圖_舌児」の現れる回数と、傍訳との対応をみると、表3のようになる。

表3 『元朝秘史』第3-12巻における「途_舌児」「圖_舌児」と傍訳の対応

接尾辞	傍訳	出 現 位 置
途 _舌 児 (全50回)	「行」 (39回)	03:08:02, 03:08:07, 03:10:04, 03:18:05, 03:32:06, 03:44:01, 03:45:07, 04:29:01, 04:30:04, 04:31:07, 05:16:02, 05:17:04, 05:20:04, 05:39:07, 05:43:06, 06:12:07, 06:16:05, 06:19:08, 07:47:07, 08:07:02, 08:08:02, 08:35:04, 08:44:07, 09:04:05, 09:42:04, 10:10:09, 10:10:10, 10:27:05, 10:43:04, 10:44:09, 11:02:08, 12:04:02, 12:16:02, 12:28:01, 12:29:02, 12:32:02, 12:32:03, 12:32:05, 12:33:09
	「裏」 (11回)	04:09:03, 04:35:09, 05:13:02, 07:25:03, <u>08:18:02</u> , <u>08:33:09</u> , <u>08:35:01</u> , <u>08:35:04</u> , <u>08:41:01</u> , <u>08:45:01</u> , <u>08:46:03</u> (下線は第8巻に出現するもの)
圖 _舌 児 (全42回)	「裏」 (42回)	03:20:06, 03:24:01, 03:32:09, 03:32:10, 04:17:01, 04:18:03, 04:18:06, 04:20:09, 05:03:09, 05:15:09, 05:16:03, 05:18:02, 05:18:05, 05:18:05, 05:18:06, 05:19:05, 05:32:09, 05:46:03, 06:21:04, 06:30:02, 06:31:06, 07:37:02, 09:23:02, 09:37:01, 09:42:09, 10:05:06, 11:05:04, 11:06:09, 11:18:10, 11:19:06, 11:26:02, 11:31:06, 11:33:08, 11:47:07, 11:50:03, 12:20:02, 12:20:04, 12:31:08, 12:33:08, 12:34:10, 12:38:06, 12:42:10

辞が「秃_舌児」と音写されている例はない。ここでは村山(1961:12)が挙げている数字の誤りを訂正して示した。

12) 子音のローマ字転写のうち γ , d, g は Ligeti (1971) の転写ではそれぞれ q, t, k となる。

『元朝秘史』の第3-12巻では第1・2巻と同様、「途^音児」の大部分に傍訳の「行」が対応しており、「圖^音児」にはすべて傍訳の「裏」が付されている。例外は「途^音児」に「裏」という傍訳が付されている11回であり、それらが全出現回数92回の中に占める割合は決して小さくない。一方、例外の出現箇所注目すると、それらは第4巻に2回、第5巻と第7巻に各1回、第8巻に7回であり、多くが第8巻に集中していることが分かる(表3で下線を付した)。第8巻では「途^音児」のみが11回現れ、「圖^音児」は現れない。第8巻に11回現れる「途^音児」のうち「行」の傍訳が付いているものは4回、「裏」の傍訳が付いているものは7回で、この7回が全体の例外の半分以上を占めている。

第8巻を除くそれ以外の巻(第3-7巻および第9-12巻)について、「途^音児」と「圖^音児」の出現回数と漢語傍訳の対応をみると次のようになる(出現位置は表3を参照)。

「途^音児」(全39回) —— 「行」(35回)「裏」(4回)

「圖^音児」(全42回) —— 「裏」(42回)

出現回数全81回のうち、例外は4回である。これにより、音訳漢字「途^音児」「圖^音児」に関しては、第3-12巻においても(第8巻を除いて)与位格接尾辞の意味・用法に基づく書き分けが保たれていたとみなすことができる。

3.2. 『元朝秘史』第3-12巻における「突^音児」と「都^音児」の書き分け

「語幹末音決定原理」に関連して、もう一方の「母音、二重母音、および子音 n, ng, l, m に終わる語幹」につく「突^音児」と「都^音児」との使い分けについて考察しておきたい。

『元朝秘史』第3-12巻において、与位格接尾辞を表す「突^音児」は全部で580回現れるのに対して、「都^音児」は全部で18回現れる。この出現回数の比率を見るだけでも、「突^音児」の方が一般的な形で、「都^音児」の現れは何か別の条件によっているのではないかと推定することができる。

18回現れる「都^音児」の用例は次の通りである。

nadur (我行 13回) 03:37:10, 03:39:03, 06:40:08, 06:40:09,
08:36:05, 09:08:03, 09:11:10, 09:17:04,

09:23:09, 09:25:05, 09:31:08, 12:04:09,
12:29:07

andur (他毎行 2回) 05:39:01, 11:35:10

čimadur (你行 2回) 06:24:03, 08:18:05

kiling-dur (怒裏 1回) 12:34:06

最後の例を除いて、いずれも人称代名詞の与位格形である。しかし、人称代名詞の与位格形にはすべて「都^音児」が用いられているわけではなく、上と同じ人称代名詞の与位格形に次のように「突^音児」が用いられている場合がある。(「突^音児」を tur と転写する.)

na^音ur (我行 1回) 08:38:03

čima^音ur (你行 2回)¹³⁾ 06:26:01, 06:30:02

また、『元朝秘史』第3-12巻で、上記以外に次のような人称代名詞の与位格形が現れるが、いずれも「突^音児」が書かれている。

bida-tur (咱毎行 1回) 03:31:06

bidan-tur (咱行, 咱毎行, 05:05:09, 05:39:03, 06:16:10, 07:27:10,

俺行, 俺毎行 18回) 08:09:09, 08:21:03, 08:36:10, 09:27:06,

09:32:02, 09:33:02, 09:34:05, 09:34:10,

09:42:06, 09:46:03, 11:05:02, 11:43:05,

12:37:07, 12:44:06

dan^音ur (您行 2回) 04:42:02, 04:42:05

これに基づけば、人称代名詞与位格形の nadur (第1人称単数) と andur (第3人称複数) の dur に限って「都^音児」を書き(例外1回)、それ以外は「突^音児」を使うという書き分けが行われていたということも考えられる。čimadur の場合はどちらとも決めがたい。

あるいは、nadur (私に), andur (彼らに), čimadur (汝に) に現れる dur (都^音児) が与位格の「接尾辞」ではなく、語幹の一部とみなされていたという可能性もあり得る。その根拠としては、『元朝秘史』の全巻を通じて、語幹内の

13) これ以外に「赤馬途児」(čimatur 你行 02:29:09) という形が1回現れる。これは第1-2巻の中で、傍訳の「行」と音訳の「途児」が対応している規則的な例である。

dur/dür が「都^音兒」と音訳されることが圧倒的に多いことを挙げるができる。たとえば, üdür「日」は, 全巻を通して76回(接尾辞の付かない単独の形)現れるが, すべて「兀都^音兒」(第1・2巻では「兀都兒」)と音訳されており, ündür「高」も10回現れるすべてが「温都^音兒」(第1・2巻では「温都兒」)と音訳されている。このほか, ba'adur(巴阿都^音兒)「勇士」, nudurqa(訥都^音兒中合)「拳頭」, oqodur(幹^音豁都^音兒)「秃尾」等も同様である。これは, 実際は dur/dür に限らず, 語幹内の du/dü を音訳する場合には「都」を使用していたという, より一般的な用法に帰することができる。

人称代名詞の与位格形 nadur(私に), andur(彼らに), あるいは čimadur(汝に)を音訳する際にこれらをまとまった一語と見て, 語幹内の du に用いる「都」の字を使用したのではないかと考えるもうひとつの根拠は, 先古典期モンゴル文語においてこれらの語がひと続きのまとまりとして(語幹と接尾辞を分かち書きせず)書かれている例が見い出されることである。たとえば, モンゴル語 Lalitavistara(普曜経)の写本中に nadur(私に)が15回, čimadur(汝に)が3回現れるが, いずれの場合も dur は語幹と分かち書きせずにひとまとまりの単位として書かれている。これに対して1回現れる bidan-dur(我々に)の場合, 接尾辞の -dur は語幹から離して分かち書きされている¹⁴⁾。この文献に andur と tandur の例はない。

このように考えた場合, 与位格接尾辞を音訳するのに意識的に用いられ, 使い分けられていた漢字は第1・2巻と同様「突」「途」「圖」の3種類だったことになり, それらの書き分けは表4に見るように, かなり平明な規則として捉えることができる。

4. 『元朝秘史』における再帰所属の与位格接尾辞「都^音里顔」と「秃^音里顔」の書き分け

最後に, -turiyan, -duriyan といった「再帰所属の与位格接尾辞」について検討する。これらは, 与位格接尾辞に「自分の～」という意味が加わった形である。

14) Poppe (1967).

表4 モンゴル語の dur/dür, tur/tür を表す漢字音訳形の書き分け規則

音 訳 形		『華夷訳語』および 『元朝秘史』第1・2巻	『元朝秘史』第3-12巻
都兒, 都 ^ㄩ 兒		語幹内 (nadur, andur, 一部 čimadur)	
接 尾 辞	突兒, 突 ^ㄩ 兒	傍訳「時・時分」 とともに	母音, 二重母音, n, ng, l, m で終わる語幹に
	途兒, 途 ^ㄩ 兒	傍訳「行」とともに	子音 γ, b, s, d, g, r で終わる語幹に
	圖兒, 圖 ^ㄩ 兒	傍訳「裏」とともに	

『華夷訳語』において、再帰所属を伴う与位格接尾辞は「突^ㄩ里顔」(3回)と「都^ㄩ里顔」(3回)という形で現れる。(「突」を tu/tü で転写する.)

「突^ㄩ里顔」の例: jerge-türiyen (分限裏 1:06b4)

qahan-turiyan (皇帝他的行 1:19b5)

čolos-turiyan (缺每裏 1:20b1)

「都^ㄩ里顔」の例: jerge-düriyen (分限 1:15b3)

irgen-düriyen (百姓自的行 2:01b5)

nuntuq-duriyan (營盤自的行 2:02a1)

これに関しては村山 (1961:117) が「書き分ける原則が確立していない」と述べているように、ここに何らかの書き分け規則を見いだすことはできないであろう。

他方、『元朝秘史』の場合はいささか事情が異なる。『元朝秘史』の全巻を通して、再帰所属の与位格接尾辞は、次の4つの音訳形が用いられている。

「都^ㄩ里顔」 66回

「秃^ㄩ里顔」 31回

「突^声里顔」 1回

「圖^声里顔」 1回

一見して明らかなように、最後の2つの形は各1回ずつしか現れないので「例外」として、再帰所属の与位格接尾辞を音訳するのに用いられているのは通例「都^声里顔」と「禿^声里顔」であるとみなすことができる。

表4では、与位格接尾辞を音訳する漢字としてもっぱら「突」「途」「圖」の3字が用いられていることを見た。再帰所属の与位格接尾辞として、それらとは別の「都」「禿」という漢字が用いられていることを見ると、そこには互いに重複を避けたきわめて整然とした使い分けの図式があったことが明らかになる。

なお、「都^声里顔」と「禿^声里顔」の使い分けに関しては、『元朝秘史』の全巻を通して、前者が「母音、二重母音、子音 n, ng, l, m で終わる語幹」につき、後者が「それ以外（子音 r, b, s, d, g, r で終わる語幹）」につくという規則性が見られるが、例外も少なくないことが知られている。表5は、「都^声里顔」と「禿^声里顔」の分布をまとめたものである。

「都^声里顔」の例外18回のうち、15回は語幹末音が r に終わる語についている（表の中で下線を付したもの）。その一方で、「禿^声里顔」も規則的な現れ28回のうち20回が語幹末音が r に終わる語についており（表の中で下線を付したもの）、これらの使い分けに明確な境界線を引くことはできない。

5. ま と め

ここで検討した『元朝秘史』および『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則は次のようにまとめることができる。

1. 『元朝秘史』の全巻を通して、与位格接尾辞 -dur/-dür, -tur/-tür の du/dü, tu/tü を音訳するための漢字は「突」「途」「圖」の3種類であった。また、再帰所属の与位格接尾辞 -duriyan/-düriyen, -turiyan/-türiyen の du/dü, tu/tü を音訳するための漢字は「都」と「禿」の2種類であり、これら5種類の漢字が互いに重複しないように使い分けられていた。

なお『華夷訳語』では、再帰所属の与位格接尾辞を音訳するための漢字として「都」と「突」の2種類が用いられていたという点が上と異なる。

表5 『元朝秘史』における再帰所属の与位格接尾辞「都^舌里顔」「秃^舌里顔」の書き分け(第1-12巻)

音訳形	母音, 二重母音, n, ng, l, m で終わる語幹	子音 γ , b, s, d, g, r で 終わる語幹
都 ^舌 里顔 (全66回)	01:16:03, 01:35:04, 02:17:01, 02:18:10, 02:38:04, 02:51:03, 02:51:05, 03:02:04, 03:18:06, 03:19:03, 03:21:09, 03:23:10, 03:34:06, 03:38:01, 04:10:10, 04:20:06, 04:28:03, 04:48:02, 05:03:02, 05:03:09, 05:20:07, 05:23:10, 05:24:01, 05:29:10, 05:33:01, 05:42:05, 06:29:02, 06:29:04, 06:30:03, 07:21:03, 07:26:05, 07:37:10, 07:43:07, 08:13:07, 08:13:09, 08:29:01, 08:35:05, 09:11:04, 09:13:05, 09:31:07, 09:46:08, 09:46:08, 10:27:06, 11:09:09, 11:24:02, 12:03:07, 12:03:08, 12:18:01 (48回)	<u>01:17:09</u> , <u>01:38:04</u> , <u>02:11:04</u> , <u>02:26:05</u> , <u>02:29:06</u> , <u>05:03:09</u> , <u>05:10:02</u> , <u>05:17:08</u> , <u>05:20:03</u> , <u>05:48:01</u> , <u>05:49:10</u> , <u>07:21:03</u> , <u>08:09:09</u> , <u>10:14:06</u> , <u>11:05:01</u> , <u>12:11:05</u> , <u>12:15:03</u> , <u>12:37:05</u> (18回)
秃 ^舌 里顔 (全31回)	01:43:02, 01:46:03, 01:46:04 (3回)	<u>01:06:01</u> , <u>01:22:01</u> , <u>01:22:05</u> , <u>01:34:07</u> , <u>01:40:08</u> , <u>01:43:02</u> , <u>01:45:09</u> , <u>01:46:03</u> , <u>01:48:04</u> , <u>02:04:04</u> , <u>02:11:07</u> , <u>02:18:10</u> , <u>02:43:09</u> , <u>02:45:02</u> , <u>02:49:02</u> , <u>02:49:09</u> , <u>02:51:04</u> , <u>03:03:09</u> , <u>04:01:09</u> , <u>04:06:06</u> , <u>04:16:04</u> , <u>04:37:04</u> , <u>07:20:08</u> , <u>09:41:08</u> , <u>09:46:01</u> , <u>10:39:03</u> , <u>11:30:05</u> , <u>11:30:08</u> (28回)

(下線は語幹末音がrに終わる語につくもの)

2. 『華夷訳語』および『元朝秘史』第1・2巻において、与位格接尾辞の3種類の音訳形「突兒」「途兒」「圖兒」は、それぞれ漢語傍訳の「時・時分」「行」「裏」に対応して書き分けられている。これを「接尾辞の意味・用法決定原理」と呼ぶことができる。
3. 『元朝秘史』第3-12巻において、与位格接尾辞の3種類の音訳形「突兒」「途兒」「圖兒」は「語幹末音決定原理」によって書き分けられている。すなわち、「母音、二重母音、子音 n, ng, l, m で終わる語幹」には「突兒」が、「子音 γ, b, s, d, g, r で終わる語幹」には「途兒」と「圖兒」が書かれる。同時に「途兒」と「圖兒」に関しては、第8巻を除いてそれぞれ漢語傍訳の「行」と「裏」に対応して書き分けられており、ここでも第1・2巻にみられる「接尾辞の意味・用法決定原理」が保たれている。
4. 『華夷訳語』では、再帰所属の与位格接尾辞の2つの音訳形「都兒顔」と「突兒顔」を書き分ける規則は確立していない。『元朝秘史』の全巻をとおして用いられている再帰所属の与位格接尾辞の2つの音訳形「都兒顔」と「秃兒顔」に関しては、不徹底ではあるが「語幹末音決定原理」による書き分けの傾向が認められる。

参 照 文 献

- 石田幹之助 1931 「女真語研究の新資料」桑原博士還暦記念祝賀会（編）『桑原博士還暦記念東洋史論叢』1271-1323, 弘文堂.
- 小澤重男 1994 『元朝秘史』岩波新書346, 岩波書店.
- 栗林 均 1999 「『孝経』のモンゴル文語における曲用語尾の特徴」 *ALTAI HAKPO (Journal of the Altaic Society of Korea)* 9: 125-134.
- ・确精扎布 2001 「『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引」東北大学東北アジア研究センター.
- 服部四郎 1946 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂.
- 村山七郎 1961 「華夷訳語と元朝秘史との成立の先後に関する問題の解決」『東方学』22: 130-115.
- 冯 蒸 1981 「“华夷译语” 调查记」『文物』2 (总297号): 57-68.
- Haenisch, Erich 1937 *Manghol un Niuca Tobca'an (Yüan-ch'ao pi-shi): Die Geheime Geschichte der Mongolen.* Leipzig: Otto Harrassowitz.
- Ligeti, Louis 1971 *Histoire secrète des Mongols.* (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta I.) Budapest: Akadémiai Kiadó.
- 1972 *Monuments en écriture 'phags-pa. Pièces de chancellerie en transcription chinoise.* (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta III.) Budapest: Akadémiai Kiadó.
- Pelliot, Paul 1949 *Histoire secrète des Mongols: Restitution du texte mongol et traduction française des chapitres I à VI.* Paris: Adrien-Maisonneuve.
- Poppe, Nicholas 1967 *The twelve deeds of Buddha. A Mongolian version of Lalitavistara. Mongolian text, notes, and English translation.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

**On the Writing Rule of Chinese Characters
for the Mongolian Dative-Locative Suffixes
in 《Yüan-ch'ao pi-shi》 and 《Hua-i i-yü》**

Hitoshi KURIBAYASHI

(Tohoku University)

The five Chinese characters 突, 途, 圖, 禿, and 都 are used for the transcription of “tu” and “du” of Mongolian dative-locative suffixes *-tur*, *-turiyan*, *-dur*, *-duriyan* in “Yüan-ch'ao pi-shi (hereafter SH)” and “Hua-i i-yü (hereafter HIIY)”. According to Murayama (1961), there existed two principles upon which these characters should be written. In HIIY and the volumes 1-2 of SH, 突兒, 途兒, and 圖兒 are added (1) to verbal nouns, (2) to words expressing human beings, human groups, and animals, and (3) to other words, respectively. On the other hand, in the volumes 3-12 of SH, 突^舌兒 and 都^舌兒 are added to stems ending in vowels, diphthongs and consonants *n*, *ng*, *l*, and *m*, whereas 途^舌兒 and 圖^舌兒 are added to stems ending in consonants *γ*, *b*, *s*, *d*, *g*, and *r*.

In this article, the author points out the fact that 突兒, 途兒, and 圖兒 are used respectively with Chinese translations “時分・時 (at the time of ~)” “行 (to ~)” “裏 (in ~)” in HIIY and the volumes 1-2 of SH. The correspondences are so consistent that we conclude that these Chinese characters were used on the basis of the meanings of the dative-locative suffixes which Chinese translations denoted. In the volumes 3-12, 途^舌兒 and 圖^舌兒 are added to stems ending in consonants *γ*, *b*, *s*, *d*, *g*, and *r* and at the same time they are used respectively with Chinese translations “行 (to ~)” and “裏 (in ~)” to the exclusion of the volume 8. Here in the volumes 3-7, 9-12, we can confirm that the Chinese characters were written according to both the meanings of dative-locative suffixes and the final sounds of stems.

(受理日 2001年8月22日 最終原稿受理日 2001年10月29日)